

自然界と保育

畔柳 銀子

梅の花はゆかしき香をはなちて鶯をむかへ菜の花は黄金色の毛氈をしいて白蝶を迎ふる用意をなしつつある此頃もう日あたりのよい處にはなつかしくすみれの一もと二もと謙遜らしく頭低くしかも色よく咲きそめました。

それからわれ等の造るべき世となりぬと何れもあたたき太陽の光に元氣つけられて芽の中にていろ／＼の花が用意をして居ります。

神の如き幼児はそれよりもおだやかに最も親切に守り教ふる自然の懷に抱かれやうとして居ります。幼な兒には人爵貧富なしや高きあたりより賤が伏屋にすまへるものまで人工の美しと見ゆる庭に兒女と乳母にかしづかれ散歩するあたりより父親は麥畑耕し母親は春の田にかへす／＼も打見やられて摘む花のくさ／＼にたのしめる兒何れも花は唯一の恩物となりましやう。

此恩物を如何に取扱ふべきかわが國にては小供が花を見るときあゝ奇麗だといひ直ぐにそれを採り暫くすると何となしすて中には採みちらすが如き惜酷なる事をなし平氣なれども米國に於ては先天的のやうで花を大切にしあゝ奇麗と側らに走りよりながめてそのまゝ分るゝといふ風にて決して採るなどの事なしました採らんとするものあれば誠むるに「この花は汝等の如く成長しつゝあるものなり折角大きくなつて美しく汝等を喜ばせんとしつゝある花を可憐そらにと」幼児等に比して教ふるといふ。

此教ふる親も幼児の前にては花はとらぬなるべしこれきゝて曰れも此花をめぐみしと思ふに幼児等のする事ある前に其花の木の下につれては誠めたるに短日月なりしも此蕾は誰さんわれは何子さん大きく明日はどんなになりましやう明けては先生花の處へゆきましやうと樂しむやうになりゆきしが此春も忘れず花をたのしみくるゝや否やとはこ

れよりの實驗なり

また種子蒔きて水をかけ肥料をやりて培養せしむる事の兒等をたのしませしめまた天然物を大切に思ふの念を養はしむるによき事は皆人の己に知らるゝ處今更ながら感せられぬ若し何時の間にか犬など入りて若葉の芽を踏める時など一大事と走せ來りて何事かと思ふばかりに報告するなどその一つのしるしなるべし、

バツタコホロギ、の如きものも友として遊ばしむることその足頭胸腹翅など一通り氣をつけさせのちバツタの御家へ歸しておやりなさい皆さんも父さんや母さんの處へお歸りにしましやうと歸る時にはなたしめまた室内に入る時にはその時の詞として幼兒と同じ心にならしめいたはらしむればわの無慘なる翅をちぎり手足をとりする如き事は見ず。

花をもみちらすよりは、虫けらの手足をとりする如き有様よりはこれを愛しいたはるの良き風なる

事はたれ人も知る處、いかでたゞ花をとりてはいけません虫をおさへてはいけませんの消極的抽なる取扱ひをなす人はなからんも……兒等をして將來此複雑なる世の中に立ち、生存競争ますゝはげしかるべき時代の活動をなさしむるにつけ、その間に兒等の生涯如何なる處にありてもはなれぬ此偉大崇高なるしかも教るにおだやかに親切なる自然界の天恵物を以て心をなぐさめ、清くして國家の大事業にたずさはらせ、秩序正しき自然物によりて養はれたる觀察力を以て、四周を觀察し身を處し事に敏にして國家の幸福を來すべき源泉たらしめ得べくば、此自然界を利用したる最上となるべしこの利用をなすは保育者なり幼な兒に最も多く接するものは自然物なり、これを以て幼な兒の心の中に植ふる種子はそも如何なる花如何なる實を結ぶべきか貴きこの恩物の取扱ひにつきて氣づかれたるふしん、此紙上に多く紹介せられ御互に兒等の爲めにはかりたき事とこそ